

六条瓦版

番外
発行所
パソコンクラブ
編集 広報部
発行 不定期
適時無料配布

正常化の偏見

正しい情報で正しく恐れる

正常化の偏見とは、ひとことと言くと、災害などで目の前に危険が迫っていても、正常な日常生活の延長線上の出来事として捉えて、「自分は大丈夫」「まだ大丈夫」「どうせ大したことない」などと考えてしまう人間の心理的な傾向のことです。

地震、津波、火災などの災害に出くわしても、危険を感じ取ってすぐに行動できる人は実は思いの外少なく、自分はこの災害で死ぬかもしれないと考えて、すぐに逃げる事ができる人は少ないと言われています。

かつてないほどの短時間で大雪が降ると気象庁が呼びかけても、夏タイヤでドライブに出掛けたりとか、今回の能登半島地震での余震に注意と呼びかけられていても危機感を持たないとか、自分はこんな災害に合うわけがないという根拠のない幻想を、多くの人が抱きがちです。新コロナウイルスについても、どこかでこんな思いが見え隠れしていました。雰囲気は流されてしまうことは案外です。国や県がいくら対応策を出しても、国民・県民が真剣に呼応せず、一部の心ない人々による無責任な行動のため、この感染拡大は止まらず拡大してしまいました。能登半島のボランティアの場合も同じで、積雪の伴う雪と注意されていたにもかかわらず、夏タイヤでボランティアに駆けつけた為、途中でスリップし、救援物資を積んだ後続車に迷惑をかけていました。防災・減災の心得が役に立たなかった一例です。これは、人災と言っても過言ではありません。まずは正しい事

実を把握して正しい知識を得るよう努めてほしい、そのために、日頃からの思考と、嘘をつかないデータの読み方を、身につけることが大事だと元危機対策防災課長は語ります。東日本大震災から13年が経ちますが、当時を振り返ると実際に津波避難の警報が出ても避難しない人が多く、実際に津波が目視にて確認できるようになってから避難する人がおり、結果として津波からの避難で逃げ遅れてしまいました。結果、津波が街を飲み込む映像でも、後ろから津波が来ているのに走らずに歩いて避難しようとし、津波に飲み込まれてしまう人たちの映像がニュースなどで流れていました。また、平成26年に発生した御嶽山噴火では死亡者の多くが噴火後も火口付近にどまり噴火の様子を写真撮影していたことがわかっています。

いづれの事例も「まだまだ大丈夫だろう」「まさか自分が災害に巻き込まれることはないだろう」という正常化の偏見が働いていたと考えられます。災害時に、なぜ人は逃げないのか



被害に遭った人たちに調査をすると、大抵の人は「逃げようと思った」と言いまふ。逃げなければならぬという事は百も承知している。けれども、結果として人は「逃げていない」のです。

頭では逃げるべきだとわかっていても、実際に自分は逃げていない。そこに矛盾が生じますが、それを解消するために、人は逃げていない自分を正当化しようとしています。かつて大雨や津波がきて避難勧告が出されても自分は一度も大きな被害に遭わなかったとか、隣の家も逃げていないとか、理由は何でもよい。隣は隣で同じように「隣も逃げていない」と思うことで「安心のネットワーク」がつくられてしまい、結果、地域全体で逃げ遅れてしまう可能性

もありです。もありません。逃げる、避難するという行為は、家屋家財をすべてそこに置いたまま立ち去ることですから、そもそも簡単なことではありません。むしろ人は逃げられなくて当たり前だとすら言えます。こうした状況下で必要になるのが、「率先避難者」の存在です。逃げる気はあるけれど逃げられない人たちの中にあつて、「私は逃げるぞ」と声を大にして避難する人が、地域に「人はいいではないですが、そうした役割を担う人がいることは、地域の防災力を高める上で重要」です。

逃げなければならぬことは百も承知の住民に、頭ごなしに逃げることの必要性を訴えても意味がありません。そこで重要になるのは日ごろからの防災教育です。その材料のひとつとして有効なのがハザードマップの作成・配布です。現在、国土交通省が洪水ハザードマップの作成を義務化しているため、全国約15000の自治体で作成・配布の必要に迫られています。一方でハザードマップは「災害イメージの固定化」を生む危険性があることも考慮

すべきです。マップに「浸水1m区域」と書かれた六条地区の住民は、「そのくらいであれば自力でなんとかなる」と思い込んで避難が遅れる可能性もあります。次にくる水害がマップに書かれている水深である保証はまるでもありません。それ以上かもしれないし、以下かもしれない。行政側が配る際には「ここに書かれてあることはあくまでも目安です」と言わなければなりません。しかし、木造の住宅と鉄筋のアパートでは避難の仕方が異なり、マンションの本階であればすぐに逃げずに自宅にいた方が安全というケースもあります。いたずらに恐怖心を煽るのではなく、自分の住んでいる場所の災害リスクと、個々の状況に即した避難の仕方を住民一人ひとりに客観的に知ってもらうこと。完全な防災より、可能な限り被害を小さくする「減災」を目指すことが、まずは重要

です。また、逃げるというのはあまりカッコいいこととは思われないのですが、逃げることは恥ではなく、しかも役に立つというのが防災上では大切です。昔の中国のことわざに、「君子危うきに近寄らず」というのがあり、危ないと思ったらまず逃げておくのが万全、安全だということをこれから考える必要があると思います。特に自治体が「避難準備・高齢者等避難開始」あるいは「避難勧告」あるいは「避難指示(緊急)」というものを出したときは、本当に科学的な根拠に基づいて「危ない」と言っているわけだから、自分の思い込み、「正常化の偏見」で逃げ遅れるということがないように、特に注意してほしいと思います。逃げさえすれば命は守れるので、まず逃げることを大切にしていただき、日頃災害は、モードが変わりますので、災害時は危険な所には一切近づかないというふうに考えてほしいものです。戦災から復興途中の福井県を襲った福井地震から今年で76年です。いつ起きてもおかしくありません。



六条公民館
危機対策